

# ミチニワと観測所

榎村芙実 + 榎村研究室 2023

プロローグ	—————	P01
観察、観測 <i>Observe</i>	—————	P03
天候、気候、風土 <i>Micro Climate</i>	—————	P06
観測所 <i>Observatory</i>	—————	P12
微気候観測所 <i>Micro Climate Observatory</i>	—————	P16

# URAYASU ART PROJECT ? 〈浦安藝大〉

本プログラムは、浦安アートプロジェクト〈浦安藝大〉の一環としておこなわれました。樫村芙実+樫村研究室に、建築家の蓮溪芳仁がコーディネーターとして加わり、3ヵ年計画でプログラムが展開されています。

本冊子は、2023年におこなわれた樫村芙実+樫村研究室「ミチニワと観測所」の記録をまとめたものです。本年度は、浦安市の課題のひとつでもある「防災」と「水害」の視点を持ちながら活動を進めました。



東京藝術大学大学院の樫村研究室

## 風の中に雨の匂いを嗅ぎ分けるように

2023年の浦安での活動を、大寒の東京で振り返っています。一年で最も寒くなる2月の初旬、朝の窓ガラスがうっすら白く曇っているのを珍しがって、子どもたちが小さな指先を赤くさせながら、絵を描いています。

思い返せば、夏はとても暑かった。それでも季節の移ろいは徐々に暑さを和らげ、短くも秋と呼べる幾許かの時間があって、やがて風が冷たく感じられ暦は冬になりました。陽の温もりに蕾がほころびはじめれば風には花の香りが混ざり、寒さが忘れ去られ、季節が巡っていきます。

穏やかな移ろいだけが、日本の気候ではありません。大気の動きは、その土地ごとの山や丘に触れて時に激しくなり、海や川は荒れ、災いと呼ばれるほどに我々の生活を脅かすこともあります。この激しさから人々の毎日を守ろうとする知恵があり、大気の流れを予測する技術があります。たくさんの人々の生活のために、緻密に巡らされた大小の複雑なネットワーク。我々は、この見えない支えの仕組みを理解せずとも、毎日を過ごすことができます。守られた生活はとても快適で、守ってくれる何かに思いを馳せることもない。それらが無くなったら、と想像することなく、毎日を過ごすことができます。

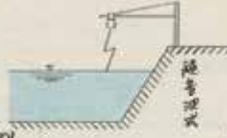
それでも、ささやかな気候の変化を気に留めることはできるはずです。そして、それを引き起こす大きな母体に思いを馳せることもできるでしょう。未来の災いを想像し怯えるためではなく、太陽・風・雨と我々が直接接触合っていることを思い出し、我々の感覚や能力を呼び起こすきっかけとなれば、それは、生きていくことの喜びにも繋がるのではないのでしょうか。

今日この穏やかに移ろう気候をありがたいものだと感じるために。また、気候変動という地球規模の大きな動きを、毎日のこととして自分の関心に引き寄せるために。

檜村芙実



Amazon Tall Tower Observatory (ATTO)



観音湧式

水位計

浮上式 / 水圧式 / 超音波式

## 微気候観測所とは？ Micro Climate Observatory

ラジオゾンデ

上空の気  
を毎分  
地上へ  
高度 30 km の大気の状態  
を観測



Foucault pendulum

フーコーの振り子  
地球の自転現象を示す  
演示実験

・フリスコ・パンパシオン / 1851年



気象衛星やさまざまなデータ収集方法によって、地球上のあらゆる場所の未来の気候情報が得られる現在、百葉箱のような、小さな範囲の‘微’気候 (‘Micro’ Climate) を観測することを考えてみます。気温や湿度のみならず、水や風、そして人の動きなどを含めた、その土地を観測する場所を設計し、制作します。

以下のように考えてみます。

観察、観測 (Observe) とは？ テクノロジーに頼らない観測に意味があるとすれば、それはどんな？

天候、気候、風土 (Micro Climate) とは？ 私たちの日常 / 非日常にどう影響しているのでしょうか？

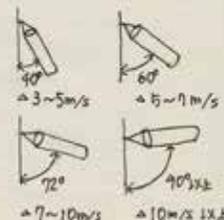
観測所 (Observatory) とは？ 観測所に人の居場所が必要なのか？

浦安海中観測地点

水質、風向・風速、  
気温、潮流・流速



高速道路の吹お流し



百葉箱

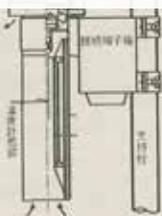
温度計 (Max. min)

湿度計

地上 0.5 ~ 1.2 ~ 1.5 m

日照計

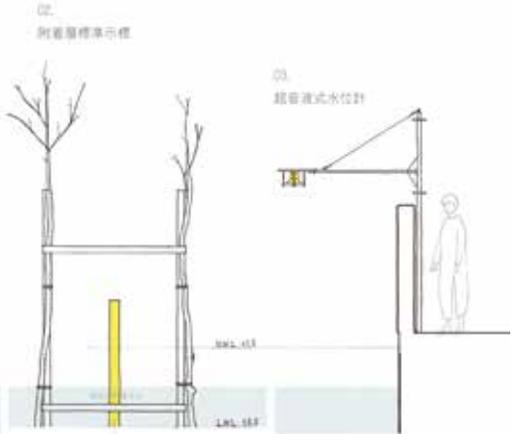
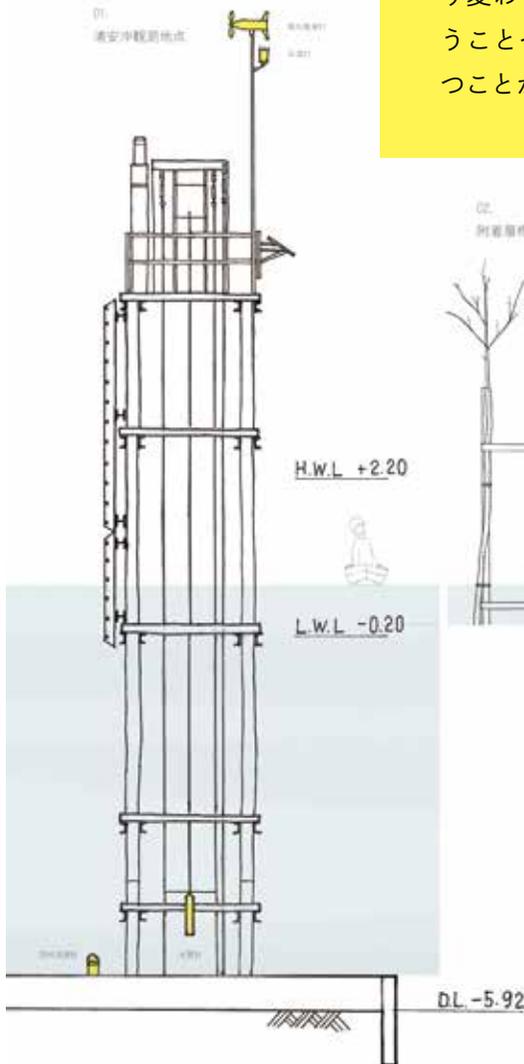
アマダス 地上気象観測所 四葉木  
AMeDAS ... 地球気象観測システム  
Automated Meteorological Data  
Acquisition System



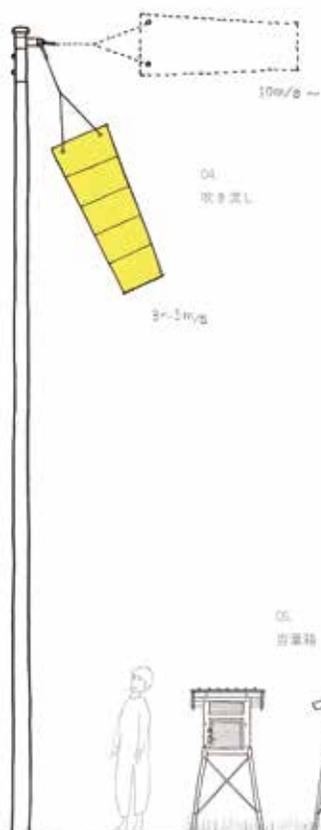
## 観察、観測 Observe

-テクノロジーに頼らない観測に意味があるとすれば、それはどんな？

世界には観測システムを結ぶネットワークがあり、それらの情報の集約から予測されたあらゆる場所や特定の日時の天気を知ることができます。高層天気図や数値予報が加わり、それ以前の主観的観測から客観的観測へと移り変わった現在、再び体感的に観測をおこなうことや、そのための場所はどんな意味を持つことができるのでしょうか。



黄色の部分は観測機器のセンサーに相当する部分。観測機器と私たちとの距離は「～数メートルの範囲」「さらに高層の範囲」「天体そのものや天体間の距離」とそれぞれ異なります。

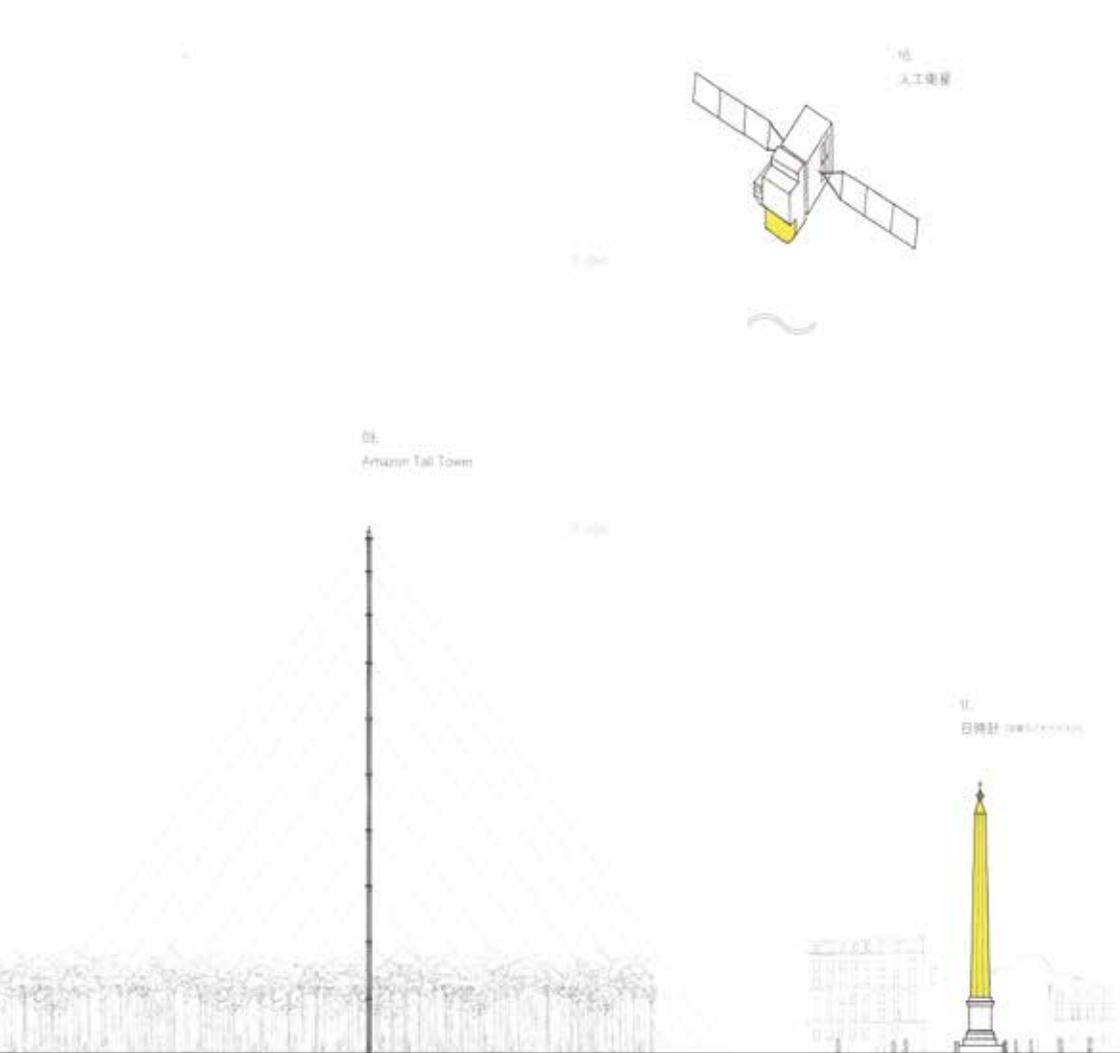


07-b  
風向風速計



08  
フジョブシ





「観測」という言葉が指す「その現象の変化量を確認し測り続ける仕組み」に興味を持ち、以下のものを調べて分類しました。

- ・ 水辺の観測機器やその構造物
- ・ 地上の観測機器やその構造物
- ・ 高層気象を観測するもの
- ・ 周期的な天体の動きを観測するもの

例えば風の観測では、周囲の影響を受けないように 10m の柱を立て、その上に風向風速計をつけたり、メンテナンスのための足場がついていたり、観測に適した位置や状態の中に成立させるために構造物があります。その構造物の全体像をみると、長い柱は上空の広さ、百葉箱はほんの小さな範囲の場所などと、その観測対象の大きさを外から想像できます。

## 天候、気候、風土

### Micro Climate

— 私たちの日常 / 非日常に

どう影響しているのでしょうか？



a. 水のネットワーク（雨水路）

浦安市下水道台帳図（雨水）

[https://www.sonicweb-asp.jp/urayasu/sp/?theme=th\\_89](https://www.sonicweb-asp.jp/urayasu/sp/?theme=th_89)



b. 防災インフラ

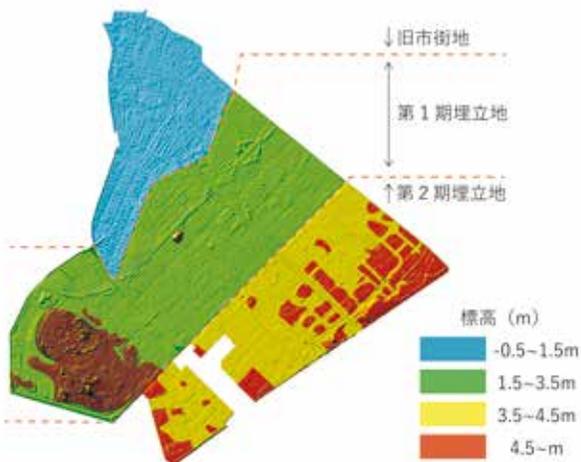
## 浦安の地形とその特徴

浦安という街の輪郭を把握するため、まずは浦安での日常生活を形作る水のネットワーク(a.)、防災インフラ(b.)、埋め立て地、土地の高低差(c.)、公園、学校といった要素をそれぞれ集め、それらを重ね合わせながら俯瞰的に街を把握していきました。

浦安では1964年に埋め立てが始まり、16年をかけて約4倍の面積まで大きくなっています(c.)。その埋め立てによって広がった地形を体感として理解するために、浦安を貫ぬく境川沿いを中心に実際に走るリサーチをおこないました(P08,09)。埋め立てによって市域が拡大する前からあった浦安の元々の街、元町エリアでは橋を渡るた

めの高低差が顕著に体感された一方、埋め立てによって生まれた中町・新町エリアでは平坦な道が海に向かって一直線に伸び、行く先を見晴らすことができました。

また、元町エリアには「ミチニワ（道庭）」と呼ばれる道のような庭が、建物の間や個人の庭に多く存在していた歴史があります。ミチニワは、家から川へアクセスするための通路であると同時に、家事や漁業関係の作業場、近隣住民同士のコミュニケーションのための庭でもあり、周囲との日常的な時間や関係性を繋いでいた場所でした。

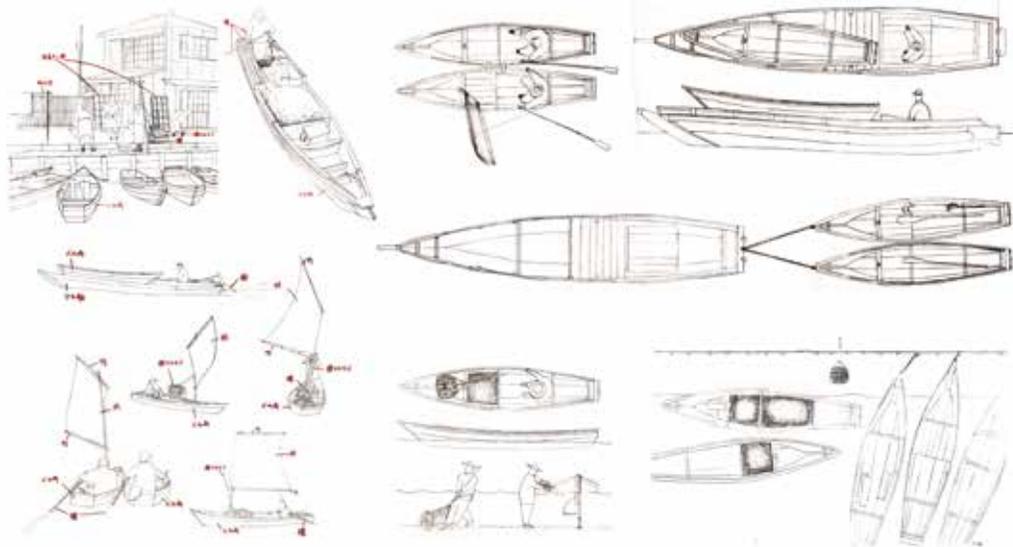




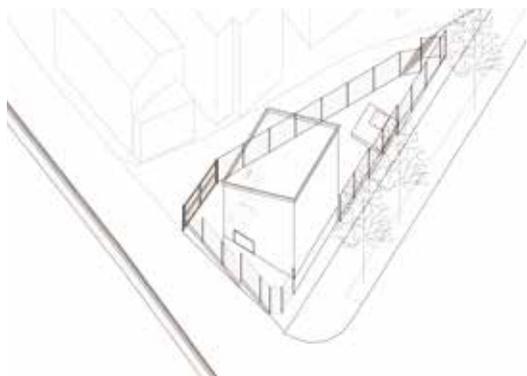
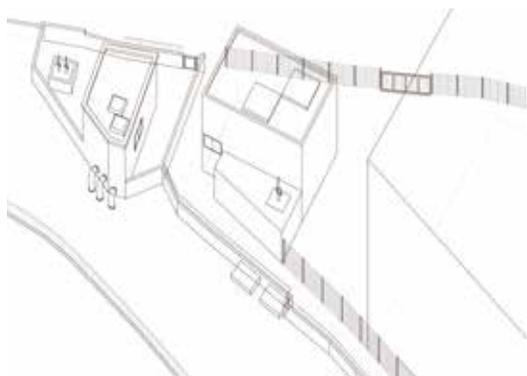


「浦安の背骨を身体でスキャンする」





e. 漁師の舟のリサーチ



f. ポンプ場の外観と内部のアクソメ図  
 (上) 猫実四丁目排水機場、(下) 江川橋排水機場

## 浦安での生活と水

かつての浦安の漁師は風向きや雲の形を体で感じとり、それらが移り変わる様子から天気を予測していました。実際に漁師が使っていた舟に乗ってみると、池で乗るような手漕ぎボートよりも水面が近く、風や波の影響を繊細に受けることがわかります (e.)。些細な天気の変化を読み解き、予測するための知恵の重要性を実感しました。

現在の浦安には、埋め立てにより海拔より低い土地があるため、雨水排水を川に吐き出し続けなければ街が水浸しになってしまい、水害は切り離せない課題です。張り巡らされた排水管や、それを集約するポンプ場 (f.) のシステムによって市民の生活が守られていますが、日々、天気のことをしなくても良いという意味では、かつての漁師と真逆の状況にあります。



g. 防災倉庫の見学

## 浦安の災害対策と日常

浦安市は、災害に備えて学校や公民館を指定避難所、公園を指定緊急避難場所に指定し、それぞれに防災倉庫を設置しています。ここで興味深いのは、例えば災害時、避難などのアナウンスをおこなう無線スピーカーは普段は時報のアナウンスに、公園にあるマンホールトイレやかまどベンチ、防災パーゴラ (h.) なども普段は休憩所として使われているなど、災害という非日常で使われるものやインフラが、日常生活の場に散りばめられて、普段は別の役割で活躍していることです。



h. かまどベンチとパーゴラ

## 観測所 Observatory

－観測所に人の居場所は必要なのか？

JR 新浦安駅から徒歩 20 分程度にある明海の丘公園は、川に面し、小学校やマンションに囲まれています。この公園は普段は憩いの場であり、近隣住民のコミュニケーションの場になっていますが、災害時には指定緊急避難場所となります。今回は、この明海の丘公園を現代のミニワの例として取り上げ、微気候観測所を設置します。





←····· 視線  
● 排水口  
↻ 風



## ワークショップ「ヤネをさがそう！」

人の居場所としての観測所を考えるために、明海の丘公園にて、小さな屋根を張ることで自分たちのための心地良い場所を作るワークショップをおこないました。

屋根はその地点の気候を知る手助けになり、一人ひとりのとっておきの小さな居場所にもなります。自分たちの身体で体感した風の向きや日の光の動き、空や雲の動き、地面の湿り具合、見える景色をヒントに、どこに、どのように屋根を張ると心地良いのかを考えました。さらに、いつもの公園に少し手を加えることで、かつてのミチニワのように人々が能動的に環境を捉えて場所を作り出すこと、それがコミュニケーションのきっかけになることを確かめました。





太陽に背を向けるようにヤネを張る人、より風の入ってくる向きにヤネを開く人、原っぱが良く見えるように少し小高い丘の上にヤネを張る人などがいました。



## 配置

一日中周囲の木やマンションの影が落ちてこないこと、周辺の木々やマンションの間隙から見える空を見渡すために周囲との距離を取ることから、開けた芝生の広場の中央付近に設置。北の方角を指すように屋根を作る部材が南北に延びていて、その先端は日時計に。三角形のふたつの屋根の間は東西軸になる。



## 吹き流し

屋根の頂点には、気流の向きや流れを見て確認するための吹き流しをつけたことで、観測所の屋根が示す方角を頼りに風向を観測できる。



## 雨鎖

雨の日には、屋根で集めた雨水が一点に集まり、雨鎖を伝って地面へと流れていく様子を観察できる。雨の強さによって、屋根の下での雨音の聞こえ方や雨の流れの見え方が変わる。

ここまでのリサーチを元に、地形や気候、その場の人々の活動を丁寧に読みとった上で、それらに関係づける構築物を制作しました。



#### 躯体材料

埋め立て地である浦安には、沿道の植栽のほかに木や林がほとんど見られず、リユースできる単管で制作した。



#### 水平面

水平面は白くツヤがあり、太陽が傾く時には光を反射する。地面から浮遊するように、3つの異なる高さを設けた。

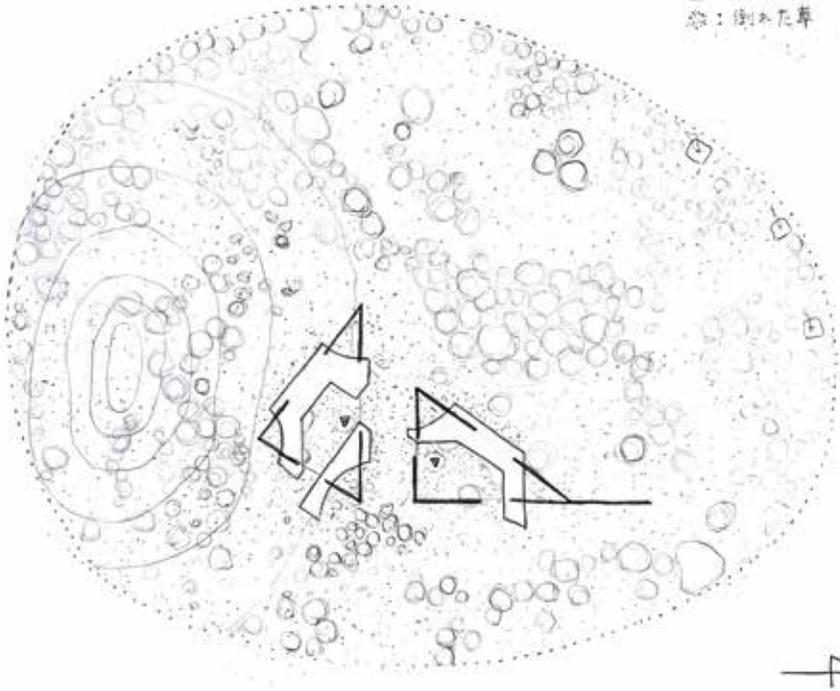


#### 屋根

風が吹くと帆のようにはためく布を用いた。観測所の仕上げ作業は、ワークショップ「ヤネをうかそう」として参加者と一緒に起こった。

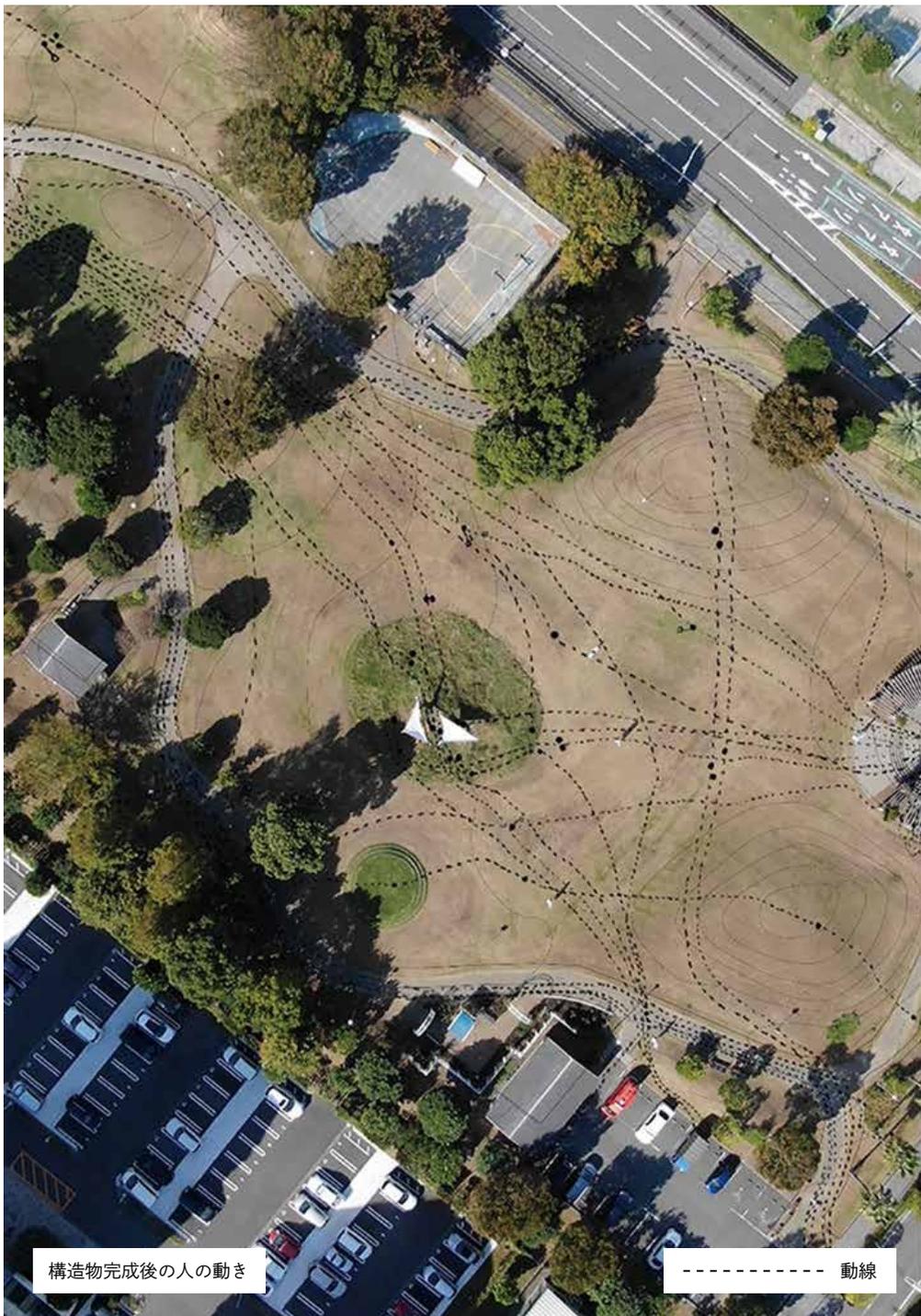
2023/11/04

○：元気な草  
◎：倒れた草



見方によって、風や雲、雨などの様子を浮かび上がらせる観測所のようなものでありながら、一息つける場所を作るものでもあり、子どもたちには遊具のようにも見える、はたまたこれらとは異なる使い方が生まれてくるものを目指して設

計し、設置後の観察を通して、敷地全体にどのようなインパクトをもたらすことができるのか、どのようにその場所や気候を捉え直すことができるようになったのかを考察しました。



構造物完成後の人の動き

----- 動線

## 観察



水平面は子どもにとっては少し大きく、寝転んで使われている。



最も高い水平面は地面から脚が離れて視線が高くなり、遊具のようにも見える。



発表会の際には、芝生舞台に対して水平面が客席のような関係をつくる。



舗装された道から芝生の中に入り込む動線が新しく現れている。



東西軸を示す屋根のスリットからは雲の流れを眺めることができる。



知り合い同士は内側を向き、知らない人とは背中合わせになるなど、一つの水平面の上で細やかな関係が生まれている。

気持ちの良い秋晴れが続いた約2週間の間、公園の真ん中に三角屋根の構築物が出現しました。普段から、屋外にいればふとした瞬間に空を眺めたり直に風を感じることはできますが、あえて構築物の中に身を置くことは、一度、周囲の自然環境と自分自身の距離を調整することでもあります。屋根の下、または水平面の上のどこで過ごすかによって、雲や日の光、風、周囲の音と自分との心地良い関係を測ったり調節したりするのです。そうすることで、一步引いた視点から気象の微細な変化に目を向けたり、肌で感じたりできるのではないのでしょうか。

設置場所である明海の丘公園は、マンションや小学校に囲まれていて周囲から「見られる」場所です。現れた構築物は、雨や風の様子だけではなく、周辺の建物や公園内の人々の動きを「見渡す」ことのできる開放性を持っています。公園や街の大きさに比べるとほんの小さなものですが、そこにやってくる人々、例えば4人家族にとっては大きな屋根です。地域の生活に密接である公園に設置することは、日常生活における公園の状況を観察することでもありました。

普段公園を通り抜ける人たちが「これは一体、何？」と惹きつけられていく時間や、新たな複数の横断ルートが生まれたり、見慣れない構築物との距離感を探ったりすること。その構築物の周りぐるぐる走り回って、思い思いに使いこなしていくこと。構築物に触れるだけでなく、制作者たちの意図を超えて、その周囲や公園全体規模の動線や過ごし方に変化が生まれます。そうして、日常的に利用している公共空間の何気ない価値を再認識することが、その場所をより深く知り使うためのきっかけになると考えています。

## トークイベント「ヤネと空のあいだ」

3回目のワークショップでは、気候についてより広く考えるために、普段から天気のことを、考え、測り、伝えている気象予報士で防災士である齊田季実治さんをゲストにお迎えしてトークイベントを実施し、実際に雲や風を観測しながら、ヤネと空の間で起こっていることを学びました。



普段はNHKのニュースウオッチ9で気象情報を担当しています。一昨年には、主人公が気象予報士を目指す朝ドラ「おかえりモネ」の気象考証も担当しました。

皆さんは普段、天気予報を見て、その当たり外れを感じているかもしれませんが、実際に天気を観測して比較することは少ないと思います。残念なことに、体感と観測がずれていると天気予報が当たっていても外れていると思われてしまうんです。そこで、今日は実際に吹き流しで風を観測したり、温度計を使って気温を測ったりしていただいて、予測と体感と観測がどのように違うかを感じていただこうと思います。

まずは今日、11月5日の気象庁の、千葉県浦安市の天気予報のマークは、曇り時々晴れです。さらに気象庁の予報を細かく見ると「曇り時々晴れ。ところにより昼前から雨で雷を伴う」とあります。「ところにより」というのは「その範囲の半分以下の場所で」という意味で使われます。マークしか見ていないと、雨に降られたら「天気予報が当たってないじゃないか」と思ってしまいがちですが、よく読んでみると、このような但し書きがあることが多いんですよ。

では早速、実際に観測をしてきてください。その上で戻ってこられたら、天気のことを詳しくお話ししたいと思います。(そしてチームごとにフィールドワークへ出発)

### 風と雲と気温の話

では、まずは風についてお話しします。風向きって、結構混乱しやすいんですよね。北風というのは北から吹いてくる風のことなので、吹き流しが南側にあると北風となります。先ほど測ってみた結果は、基本的には北東の風が多かったですね。今日の天気予報にある「北のち北東の風」は大体合っています。そして、風は弱かったですよね。風は建物の影響を受けることが多く、同じ浦安市に住んでいても、南側が開いているか、北側が開いているかによって、吹いてくる風や、体感が変わります。大きなビルがあると、ビル風が吹くので、より風が強まったりします。

吹き流しは、よく高速道路にありますが見ると風の強さがわかります。今日は吹き流しの角度は低かったと思いますが、風速3mほどの風が吹くと、吹き流しの角度が30°ほど、風速5メートルで45°ほどになります。実際に風が吹いているなど感じるの、風速5mからです。風速10m以上になると吹き流しが水平になり、高速道路で運転中だと横風に流される感覚があります。でも、風速の数字だけだとあまりわかんないですよ。なので、天気予報では、風速と合わせて風の影について具体的にお伝えします。例えば、風速15メートル以上になると風に向かって歩けないとか、風速20m以上だと非常に強いので、何かに捕まっていないと立ってられない、飛

んできたものでケガをする。台風の暴風域でもある風速25mだと、屋外での行動は危険になり、風速35m以上になると、木や電柱が倒れたりします。

さて、続いて、雲はどんな様子でしたか？おそらく積雲系のもこもこした雲と、それが広がっている層積雲と、あと上空の高い方に巻層雲が見えたのではないのでしょうか。色々ある雲の形を人間の都合で分けているので曖昧な部分もありますが、大きく分けると10種類しかないんですよ。そして、わかりやすいように雲の名前は限られた種類の漢字のみ使われています。「巻」がついている巻雲、巻積雲、巻層雲は、上空10kmくらいの高いところに、「高」がついているものは中層の2~7kmのところのできる雲です。あとは、「積」がつくのは、もこもこした雲。「層」は横に広がっている雲で、「乱」は雨が降るタイプの雲を指していて、よく見ると、これらの漢字の組み合わせで、雲の名前ができています。

それと、巻層雲という薄い雲が見えたという感想がありましたね。その辺りを見ると太陽の周りにうっすらと光の輪ができていたと思いますが、これは「日傘」や「ハロ」と呼びます。今日、久しぶりに空を見上げた方もいるかもしれませんが、意識すると意外と色々なものが見えてきますよ。

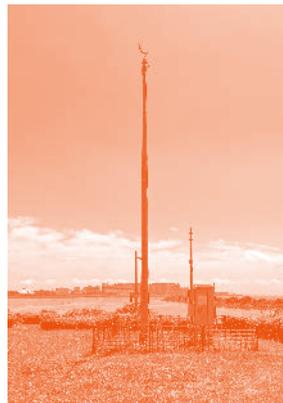
今日の最高気温は24℃の予想でした。晴れているとどんどん地上の熱が上がっていくので、14時か15時が最高気温になりますが、今日のように曇っていると、午前中に最高気温が出てもおかしくありません。温度計に直線日光が当たり続けると値が上がってしまうので、測る時には注意してくださいね。それから皆さん、体感温度はどうでしたか。今日は11月としてはありえないくらい気温が高く、日差しもあって暖かかったと思います。最高気温が25℃以上を夏日と言いますので、

夏日に近いと言えます。

最近では熱中症警戒アラート情報が始まりましたが、これは気温と湿度、風に加えて、輻射熱も加味して発表されます。輻射熱は赤外線でも伝わる熱で、地面からの熱に関連するので、例えば、日差しがあって地面がアスファルトだとより暑く感じます。ほかにも、地面に近い方が暑く感じるのも、大人よりも子ども、子どもより犬の方がいっそう体感としては暑いわけです。風速が1m上がると、体感温度が1℃程度下がりますし、服装によっても感じ方が変わります。運動すると体から発生する熱が高くなるので、その人の活動量によっても異なります。実は、いろんなことを加味して、気温の体感は変わると言えます。

### 実際の観測値

実際の浦安市の観測を調べてみましょう。実は、気象庁の1番近い観測点は、東京にあります。隣接する江戸川区の江戸川臨海という場所に気象庁の観測点があるので、そのデータと比べてみましょう。11時には気温は25.4℃、北北東の風が風速2.5m、日照時間は0.3で記録されていて、少し曇ってきた状態です。基本的に、皆さんが測ってきた値と違いはないかと思います。



江戸川臨海観測所

まず、気温の観測は日なただと温度が上がりてしまうので、筒の中(日陰)で、かつ小さな扇風機を入れて、ずっと熱が溜まらないようにして測られます。なので、実際に皆さんが感じた温度はもっと高かったですよ。高さは、大人の顔の高さと同じ、1.5mの位置で測られています。一方、風に関しては、地上からの影響と周囲からの影響を受けないために、高さ10mで測るという基準があります。雨は、水を受けてその量を観測するような、意外と簡単な仕組みで測っています。今日実際に測ってもらうと、観測場所の高さや、人の熱などからさまざまな影響を受けたと思うので、観測の基準を知っておいていただければ目安になると思います。

### 天気予報の仕組みについて

天気予報の当たり外れを知るには、予報の見方をきちんと皆さんに知っていただくことが大切です。「アメダス」って、聞いたことありますか? 「Automated Meteorological Data Acquisition System(自動気象データ収集システム)」の略で、このような観測システムが1974年から全国各地、1300カ所、17キロ四方にあります。その少し前から「気象レーダー」というものがあり、今は「ドップラーレーダー」というのが定番になってます。「気象レーダー」とは、レーダーを発して雨粒にぶつかって返ってきたときに、波長の変化で、その雨粒が移動している方向がわかります。そうすると、雨雲の小さい渦がではじめていることが把握できるので、最近は、竜巻注意情報などの局地現象の予報に使われています。ほかに、気象衛星の「ひまわり」は聞いたことありますか? 1977年にひまわり1号が打ち上げられていて、現在は8号と9号が運用されています。

天気予報とは、格子上に世界中を切り分けて、その中のデータを元に物理法則を使って

計算し、天気図を作って予測を立てています。より精度を細かくすると、計算に時間がかかりますし、なかなか細かい現象を追うのは難しいんですよ。何日後に低気圧がやってくるかという予測はできますが、例えば竜巻などの小さな現象を正確に予測するのは難しいんです。ただ、最近はコンピューターの精度が上がってきたので、より細かな精度で計算ができるようになってきて、雨の予想はだいぶ詳細な予報が出てますよね。

今日は特別に、明日の天気の話をして。明日の天気は少し難しいんですけど、気象庁は今のところ、曇りところにより雨で雷を伴い、最高気温は24℃と発表しています。私ができる限り詳しく予報すると、昼頃に一時雨、夜も雨の降るところがあり、日付が変わる頃には広く雨になりそうです。南風が次第に強まって、夜にはやや強く吹きそうです。なので、昼間に屋外へお出かけする方は、折りたたみの傘があると安心ですが、夜は風が強まってくるので、折り畳み傘をさせないような状況が起こる可能性がありますので、帰りが遅くて雨に濡れたくない場合は、レインコートや丈夫な傘があると安心です。最低気温は17℃、最高気温は24℃から25℃と書かれていますが、少しでも日差しが出ると気温が上がる可能性があるんで、25℃や26℃に変わる可能性があります。また、今日は北風でしたが、明日は低気圧が近づいてきて南風になります。湿った南風の影響で、今日よりさらに湿度が上がってくると思います。同じ気温でも、より蒸し暑く感じますので、今日の服装で暑いと思った方は、明日は少し薄着でもいいかもしれない……と、かなり細かい予報をしましたけど、ぜひ明日も齊田の予報が当たっていたとか、外れたとか、ご自分の体感を交えて、家族の話題にしていだけたらいいかなと思います。

## 実地と実物

建築学生が大学内で「実物」や「実地」に触れる機会は多くはありません。学生の取り組む設計課題は、住宅や公共施設などに関する計画を図面や模型などの資料とともにプレゼンして終了することが多いからです。

しかし、樫村研では学生自らが自分達の思い描く世界を、日本とウガンダという文化も風土も異なる2つの「実地」で「実物」としての場の観察、制作、実装、その様子を再び観察するまでをおこないます。

今回も浦安での活動に加え、ウガンダでの微気候観測所も合わせて制作され、日本では柔らかな光の元で、ウガンダでは強い影の元で、気候と対話する場が制作されました。

建築家の役割は環境を変えることではなく、人々が環境の変化に気付く手助けをすることでもあります。生み出した空間やそのための制作行為そのものが、関わった人々にとって自分たちの暮らしと共にある環境の小さな変化＝微気候について考えるきっかけとなればと思います。

蓮溪芳仁

10月下旬の浦安は驚くほど晴天が続き、夕陽と家に帰る子どもたちを見届けてから展示を終える毎日でした。公園の中でそれぞれが心地よい場所を見定めながら過ごした、ゆっくりとした時間が印象に残っています。

阿部朔太(樫村研究室修士1年)

展示中、公園での子どもたちの様子が印象に残りました。白い面に寝そべる子もいれば、おにごっこの途中でびよんと飛び乗ってまたすぐどこかへ走っていく子。場所を思い思いに使っていたときのことを思い出させてくれます。

長谷果奈(樫村研究室修士1年)



ウガンダでの制作の様子  
(2023年8月)

公園のど真ん中へそろそろと、あるいはぐんぐんと歩を進め、たどり着いた先で腰を下ろします。辺りを、空を、ゆっくり見渡してみると、なんて気持ちよいのでしょうか。その時公園が一瞬、それぞれのための居場所になった気がします。

山田楽々(樫村研究室修士1年)

## 年間スケジュール

- 4月 浦安リサーチ開始
- 5月 映像制作、観測データまとめ
- 6月 観測所プラン計画開始
- 7月 浦安の道庭リサーチ / 学内発表
- 8月 ウガンダでのリサーチ / 制作
- 9月 浦安でのリサーチ / 制作
- 10月 制作 / まちなか展示 \*1/ ワークショップ \*2
- 11月 トークイベント \*3/ 展示撤去
- 12月 学内発表

### \*1 まちなか展示

10月22日—11月5日

〈浦安藝大〉まちなか展示 ミチニワと観測所 『微気候観測所』

会場：明海の丘公園

### \*2 ワークショップ

10月1日

ワークショップ「ヤネをさがそう」開催 会場：日の出公民館、明海の丘公園

10月19日

ワークショップ「ヤネをうかそう」開催 会場：明海の丘公園

### \*3 トークイベント

11月5日

トークイベント「ヤネと空のあいだ」開催 会場：日の出公民館、明海の丘公園

#### 「ミチニワと観測所」

樫村美実+樫村研究室（樫村研究室修士1年：阿部 朔太・長谷 果奈・山田 染々、蓮溪芳仁）

制作協力：鶴井洋佑、木村優作、關田重太郎、株式会社あずま工房 トークイベントサポート：森純平、角野キラリ

運営：浦安藝大事務局、浦安市生涯学習課

#### 浦安アートプロジェクト「浦安藝大」

主催：浦安市、東京藝術大学

編集：下里杏奈（檸檬） デザイン：山田美法（檸檬） 発行：浦安市、東京藝術大学 発行日：2024年3月25日